

6. 人間と森林の関係から見えてくるもの

日本の国土の変わり方をここ 400 年から 500 年の間で見ると、山は禿山から森林化し、都市へ人口が集中し、河川は改修され、丘陵地は人口改変されたという印象を誰もが受けるのではないのでしょうか。一見、自然災害への対策が進んだように思われますが、また反面新たな問題が起きているということも事実のようです。今後、災害の度に課題が少しずつみえてきて対応していく必要があるのは当然ですが、事前に何が問題なのかを明確に把握して、次世代へつなげないと意味がありません。そうしないと、せっかくの施策も屋上屋を架すことになってしまい、さらに進化した災害を呼び込むことになりかねません。

例えば、禿山は土砂の生産が激しく、河川を埋め、海岸への供給はやがて飛砂となって災害として生活を脅かすということになります。禿山に植林をし、砂防ダムで抑止することで確かにその被害は少なくなりました。しかし、逆に下流では浸食が激しくなってきた新たな水害や土砂災害が発生することにもなって、海岸の後退も発生して、両立せずということになってしまいます。

地域の自然環境は、その地域の基盤である地質、地表の形状を支配する地形、それを被覆する植生、そして周囲を取り巻く気候がそれぞれ相互に作用し、反応して全体のバランスが保たれ、あるいは保とうとしているのだと思います。そこには、長い時間が必要ではありますが、お互いに行き来するのは水や大気、二酸化炭素、土砂といった物質であり、そのエンジンは太陽エネルギーです。

日本列島は地理的位置から温暖多雨という気候条件で、特に森林は主たる環境構成の要素になり、縄文時代を思うといわば人間は森林動物からスタートしたともいえません。その後の人口増加、暮らしの環境が変化してくると、自然への介入が大きくなって、地形を改変するまでになってきています。そうになると、自然のバランスが崩れ、自然の時間との齟齬が生まれてきて、あちらこちらに不具合が生じています。その不具合とは、森林のタイプと気候の関係であり、森林伐採と崩壊、地球変動が地震を起し、津波で海岸林が喪失という具合に思いがけないことが連鎖するという現象に現れます。われわれは、来た道を振り返る、安全安心を継続することの難しさ、何とかするのは何とかならないことを再認識すべきなのだと思います。

いまは森林の多面的機能を重視する環境財としての森林保全と森林施業の両立を模索しながら実施しています。しかし、このバランスが崩れると、人間の生存を脅かすことにつながるという微妙な関係にもあります。